河川湖沼と中世城館－山川綾戸城を中心に－

桜川市建設部都市整備課
越田　真太郎

はじめに【図１・３】

・結城市山川館跡（0488、P279）
・同市山川綾戸城跡（0487、P280）
・下総国結城郡下方（現在の茨城県結城市南部・八千代町北部・古河市東部）に所在する山川氏に関連する城館跡。下総国は河川湖沼の多い地域で、両城ともそれらと深いつながりが見受けられる。近年研究が深化している中世の水上交通に関する研究成果や、『茨城県の中世城館』に付属する文献史料一覧に掲載されている古文書等（掲載されている文献は「県西〇〇」などと表示）を参考に分析を行いたい。

・山川（山河）氏
結城氏初代の結城朝光の子、重光を始祖とする。結城氏の庶流ではあるが、山川氏単独で鎌倉御家人として活動し、本流の結城氏や小山氏と度々養子縁組を行うような有力な一族。結城郡下方（「山河」と呼ばれていた地域）を本拠とする。

１．山川館跡（結城市上山川）【図４・５】

・南北 195m、東西 147.5mの長方形。鬼怒川に近い平地にあり、四方を堀（幅５～６ｍ）と土塁（幅約 12m）で囲む。
現在は東持寺（曹洞宗）の境内。東持寺は寛永３年（1626）に移転してきたもの。
土塁は南と西に開口部があるが、西は寺院になってから開けられたものと想定されており、南側が虎口と考えられる。かつては北側に跳ね橋があったと伝えられている。
地表面観察や地図上では周辺に副郭の存在は見えず、単郭の館と考えられる。
・北西約 800mには奈良時代初めに建立された結城廃寺（法城寺）があり（室町時代中頃まで当地に所在）、結城郡衙も近隣に存在したであろうことが推定されることから、結城郡の中でも中心的な地区であった。
・館跡から南へまっすぐ伸びる道沿いに集落や薬師堂・観音堂（中世の大型五輪塔が残存）などが形成され、馬場（ばんば）・南宿等の地名があり、中世の景観がよく残されている。
・上記の南北道と直行する東西道は、古河方面から延びる道（下総国と下野国の国境となっており、古代道の痕跡と考えられている）の延長線上にある。この東西道が鬼怒川に当たる場所の地名は「追立（おったて）」といい、中世文書に渡河点として登場する。
【史料１】県西 38　暦応３年（1340）５月日「矢部定藤軍忠状写」
「・・・同（暦応２年）九月八日、馳参武州村岡宿、所々御陣御供仕、十月廿二日、馳向並木渡、同廿三日、越折立渡、追散凶徒、焼払在家、同駒館・野口之合戦之時・・・」
この東西道は『将門記』に見える、平良兼が真壁方面から出発して石井之宿を襲撃した際に通っ

た「結城郡法城寺之当路」と一部関連すると思われ、古代から存在する道であった可能性が高い。

・鬼怒川の渡河点（折立渡）付近には上山川河岸も所在していた。上山川河岸は慶長３年（1598）の成立とする江戸期の文書もあり、それ以前より船着き場として存在していたと考えられる。
山川氏初代山川重光は母方の縁により常陸平氏族行方氏や千葉氏の所領を継承している。また、３代貞重の弟光義（４代景重父）は潮来長勝寺所在の元徳２年（1330）銘梵鐘に見える「大施主下総五郎禅門道暁」に比定されており、霞ヶ浦（香取海）周辺に権益を持つのみならず、青森県弘前市長勝寺所在の嘉元４年（1306）銘梵鐘にも「沙弥道暁」として名がみえることから、遠く津軽にも影響力（地頭代？）を持っていた（市村 1996a・b)。

➡館跡は地域の主要な道に近接し、渡河点を抑えるとともに、鬼怒川を介した水上交通を重視した選地をしている。発掘調査はされていないので確定はできないが、こうした立地や結城廃寺の存在をみると、伝承通り鎌倉～室町時代の山川氏の館であると推測できる。

２．山川綾戸城跡（結城市山川新宿）【図６～８】

・山川館から南西へ約 3.5km 離れた、東西南の三方を山川沼に囲まれた半島状の土地に所在する。
半島の先端から曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと並び、その北側に城下町が築かれている。
現在は田畑や宅地となっており原形はほとんど残っておらず、発掘調査も行われていないため、古城図や航空写真をもとに現地踏査をして推定復元図を作成。

・山川氏が、山川館から山川綾戸城へ本拠を移転したと考えられるが、時期は不明。
結城合戦（1440～1441 年）あるいは享徳の乱（1455～1483 年、関東地方における戦国時代の始まりと位置付けられている）が契機か？

【史料２】県西 239　享徳４年（1455）閏４月「鎌倉大草子」
「・・・山川の城、真壁の城も責おとされて、いずれも成氏へ降参す・・・」

【史料３】県西 251　（康正２年（1456)）４月４日「足利成氏書状写」
「・・・(前年のこととして）一、山河兵部少・真壁兵部大輔構要害成敵讎間、可加討裁処、各退城内帰降候了・・・」

15 世紀の中ごろに、武士がそれまでの館とは別に恒常的な城郭（要害）を築城し、本拠を移転する事例が全国的にみられるという（齋藤 2006)。山川氏の事例もその一つとして考えられる。

・慶長６年（1601）に山川氏は結城秀康とともに越前国へ移る。山川領は幕府直轄領などを経て元和元年（1615）に水野忠元の領地（最大３万５千石）となる。忠元は曲輪Ⅲを新たな本丸として城郭と城下の整備を進めたとされ、寛永 12 年（1635）忠元の子の忠善が駿河へ移封された後は陣屋として利用された（古城図が残存)。

➡山川綾戸城は三方を沼に囲まれ、山川館に比べて守りやすい城郭といえる。山のない地域において、いかに守りの堅い場所に城を築くか、という考えがうかがえる選地。

・北条氏による結城・山川領侵攻
天正６年（1578）４月下旬、佐竹義重や結城晴朝による下野国壬生城攻めに対し、北条氏は壬生氏支援のため後詰の兵を出し山川綾戸城を攻める。
→関連する古文書から山川綾戸城の構造が見えてくる。

※【史料４・５】は年未詳文書で、元亀２年（1571）・天正５年（1577）とする説もあるが、『小川岱状』との関連から天正６年と判断した。

【史料４】県西 399　（天正６年）５月 22 日「北条氏政書状写」

「・・・抑至于山河近陣ニ、今日廿二、宿城悉仕払、凶徒五十余討捕候・・・」

【史料５】県西 400　（天正６年）５月 24 日「壬生周長書状写」

「・・・南陣（北条氏政）者、去廿日、山川戸張・宿城無貽被破、生城計候、彼地三方沼ニ候間、海船数多被入被取扱候、於落居ハ不可有程候・・・」

【史料６】県西 418　「小川岱状」

「・・・天正六年卯月下旬ニ、佐竹殿催多勢向壬生御出馬（中略）（北条氏政が）引卒五千余騎取越利根川、已為山川近陣、サレハ糟連井・今宿トテ城外ニ構アリ・・・」

①山川綾戸城の周囲には「戸張（とばり）」「宿城」がある。「糟連井（粕礼）・今宿トテ城外ニ構アリ」とも関連。

→この「戸張」は城下町もしくはその周辺の防御線を指すか。

「糟連井（粕礼）」「今宿」は城跡の東側に現在も地名が残っており、この宿（集落）を臨時に城郭化したものを「宿城」と呼んだと思われる。

②戸張・宿城とは別に「生城（はだかじろ）」がある。

→戸張・宿城を破られると「生城」だけになる。曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのみ（もしくは曲輪Ⅰのみ）の状態を呼んだものか。

③城は３方が沼に囲まれており、城攻めには船が使用されている。

→河川湖沼との関わりが大きいのが山川綾戸城の特徴

・「綾戸」地名からは川津の可能性も推定できる。

【史料７】県西 490　天正 18 年（1590）９月 20 日「豊臣秀吉宛行状」

綾戸城を「あやつ」（綾津）と記している。

【史料８】県西 2-214　（江戸後期）「山川小四郎朝顕覚書」

「・・・あやどか船渡し之所なれハ・・・」

【図７】（江戸前半作成）「山川古城図」

「鮒太郎（鮒之太郎明神）」の記載。

→船による城攻めについて

【史料９】県南 208　慶長８年（1603）６月 20 日「野口豊前守戦功覚書写」

「「天正十六」一、谷田部坊地と申所へ、てきふねにて川ヲ取こし申候所ニ・・・」

野口豊前守は下妻城主多賀谷氏の家臣。谷田部城付近の戦闘か。

【史料 10】県西 343　永禄 11 年（1568）８月 28 日「簗田持助感状写」

「今度敵以兵船、塚崎之郷（現境町塚崎）へ相動候処、従城内より以船懸合、正面之奥数刻相戦、敵致合討事・・・」

【史料 11】県西 383　天正２年（1574）閏 11 月３日「北条氏政感状」

「今日、於水海表（現古河市水海）敵船討留砌走廻候、武勇感悦候・・・」

➡常陸国・下総国の内陸部でも船による兵員輸送や船戦は行われており、山川綾戸城攻めにも大きな役割を果たしたと考えられる（海船は・・・？）。

一方、陸上交通は城下町から北へ伸びる道が結城城へ繋がるものの、周辺の主要な道と城下町は

直結していない。築城にあたって既存の主要道を付け替えた様子は見受けられず、城下町である山川新宿を新たに設置したとはいえ、周囲の宿を大規模に移転させた様子も見受けられない。
ただし、水上交通のみを重視して陸上交通を軽視しているということではなく、既存の交通網や宿をそのまま生かし、防御線としても活用している様子がうかがえる。
→国衆レベルの城の特徴？

おわりに

天正６年の北条氏による攻勢に山川綾戸城が（生城になりつつも）耐えるなか、佐竹氏を旗頭とした反北条氏連合（東方之衆）は壬生城攻撃を中断し小川台（現筑西市）に陣を敷く。これにより北条氏は山川陣を引き、4km　ほど離れた武井・但馬（現結城市）という場所に陣城を構える。戦況は膠着状態となり、やがて北条氏が撤退していく。

この一連の戦は「小川台合戦」「常陸小河合戦」などと呼ばれ、近年では北関東の領主層が越後の上杉謙信（天正６年３月死去）に頼ることなく主体的に自力で北条氏と対抗し進出を阻止したものとして評価されている（市村 2009、荒川 2013）。

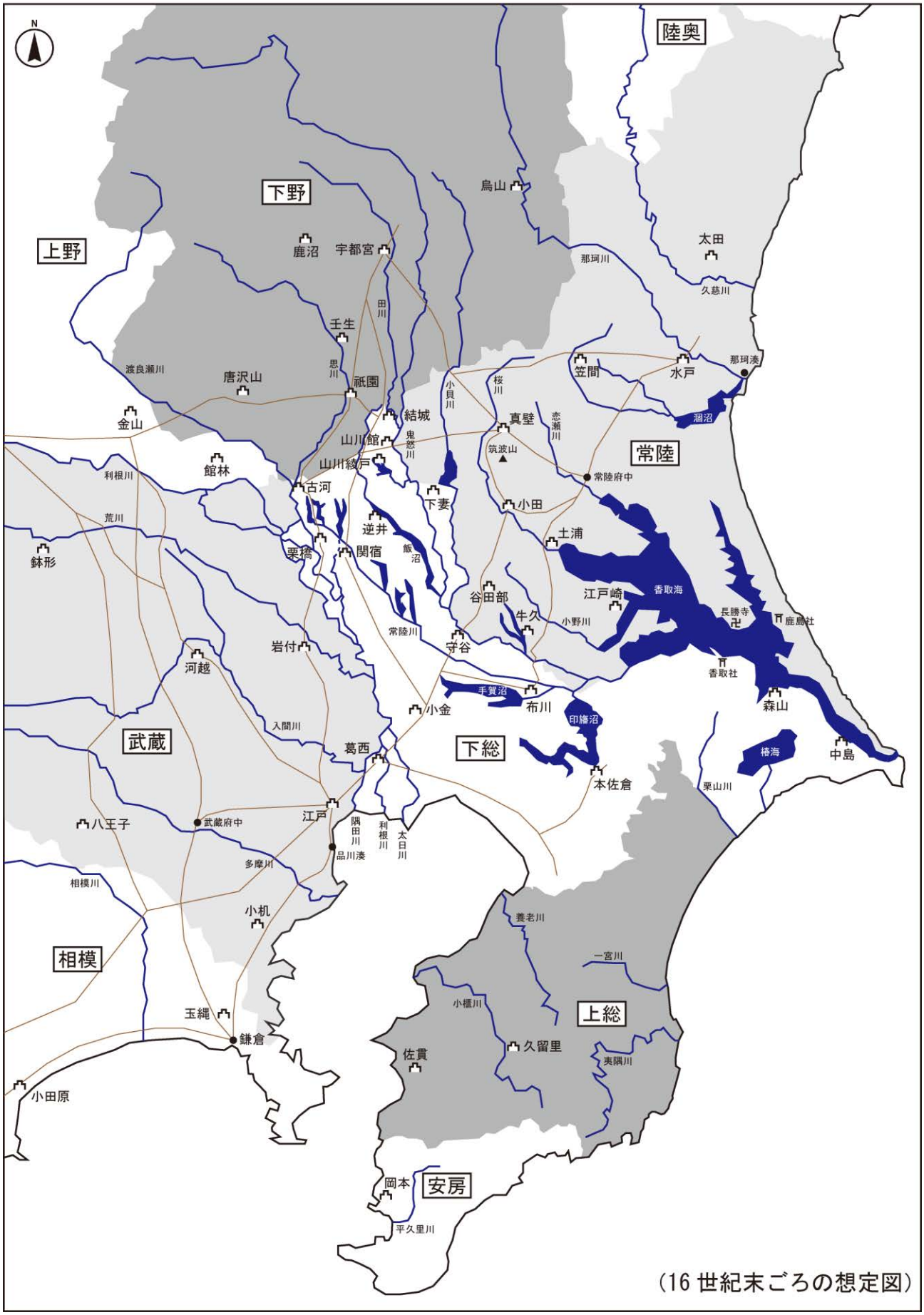
また、「小川台合戦」と同時期に謙信の甥の景勝と、北条氏から養子に入った景虎の間で行われた上杉氏の後継者争いである御館の乱（おたてのらん）が起こっている。この争いに際し、北条氏が景虎に対して有効な支援をすることができず、結果として景虎は自害、景勝が上杉家を継ぐこととなった最大の要因として、結城・山川の戦に釘づけにされてしまったことを挙げる分析もある（黒田 2011）。

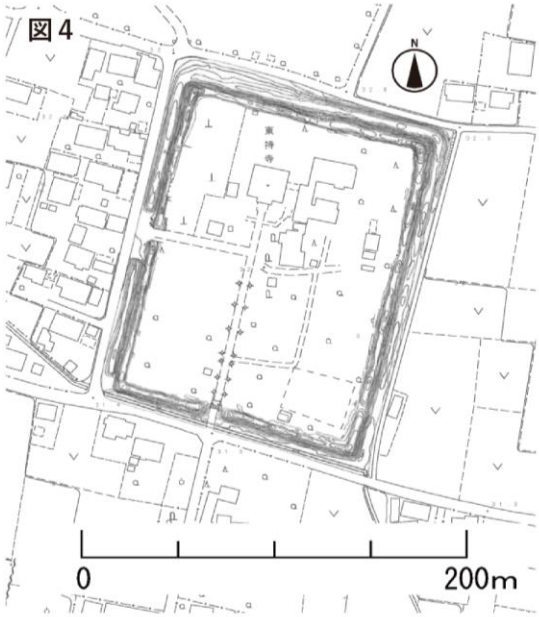
山川綾戸城が攻防戦に耐えきったことは、一局地戦の結果にとどまらず、その後の関東の戦国史にとって大きな意味を持っていたと考えられる。

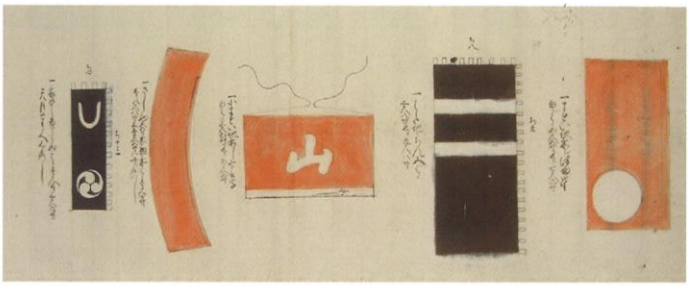
主要参考文献

・荒川善夫「古文書で見る常陸小河合戦」『北関東の戦国時代』高志書院　2013 年
・市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版　1994 年
・市村高男「下総山河氏の成立とその背景－中世常総地域史の再検討－」
『中世東国の地域権力と社会』岩田書院　1996 年 a
・市村高男「鎌倉末期の下総山川氏と得宗権力－二つの長勝寺梵鐘が結ぶ関東と津軽の歴史－」
『弘前大学国史研究』100 号　1996 年 b
・市村高男『東国の戦国合戦』吉川弘文館　2009 年
・黒田基樹『戦国関東の覇権戦争　北条氏 VS 関東管領・上杉氏 55 年の戦い』洋泉社　2011 年
・黒田基樹『図説戦国北条氏と合戦』戎光祥出版　2018 年
・齋藤慎一『中世武士の城』吉川弘文館　2006 年
・佐々木倫朗「11 謙信の南征、小田原北条氏との抗争」『佐竹一族の中世』高志書院　2017 年
・三和町史編さん委員会『三和町史　資料編　原始・古代・中世』三和町　1992 年
・三和町立資料館『第３回企画展展示図録　中世の豪族・山川氏』2002 年
・千野原靖方『中世房総の船』崙書房　1999 年
・結城市史編さん委員会『結城市史　第四巻　古代中世通史編』結城市　1980 年
・結城市史編さん委員会『結城市史　第五巻　近世通史編』結城市　1983 年

図 1


N
陸奥
下野
上野
常陸
武蔵
下総
相模
上総
安房
烏山
鹿沼
宇都宮
太田
那珂川
久慈川
壬生
田川
渡良瀬川
唐沢山
思川
祇園
結城
小貝川
桜川
笠間
水戸
那珂湊
涸沼
金山
山川館
鬼怒川
真壁
恋瀬川
筑波山
館林
山川綾戸
利根川
古河
常陸府中
下妻
小田
荒川
逆井
土浦
鉢形
栗橋
関宿
飯沼
谷田部
江戸崎
香取海
牛久
小野川
長勝寺
鹿島社
常陸川
守谷
岩付
河越
香取社
手賀沼
布川
森山
小金
入間川
印旛沼
葛西
椿海
中島
本佐倉
栗山川
八王子
武蔵府中
江戸
隅田川
利根川
太日川
品川湊
多摩川
相模川
小机
養老川
一宮川
玉縄
鎌倉
小櫃川
久留里
佐貫
夷隅川
小田原
岡本
平久里川
（16 世紀末ごろの想定図）





参考：山川氏旗指物図（『中世の豪族・山川氏』）

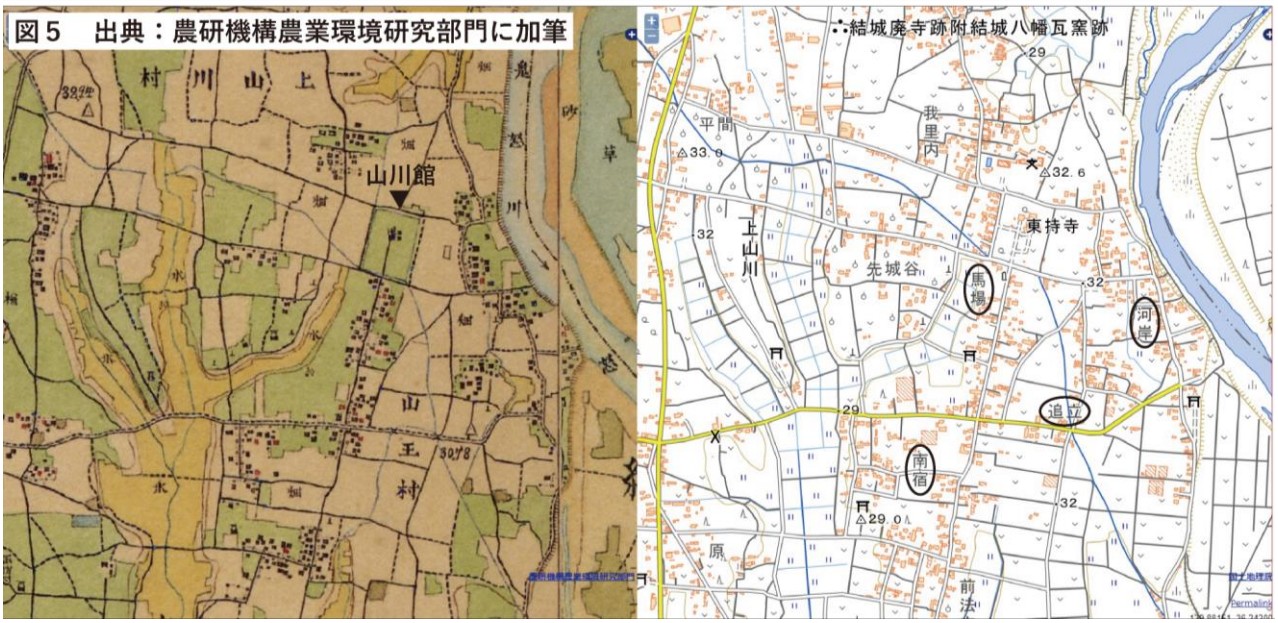
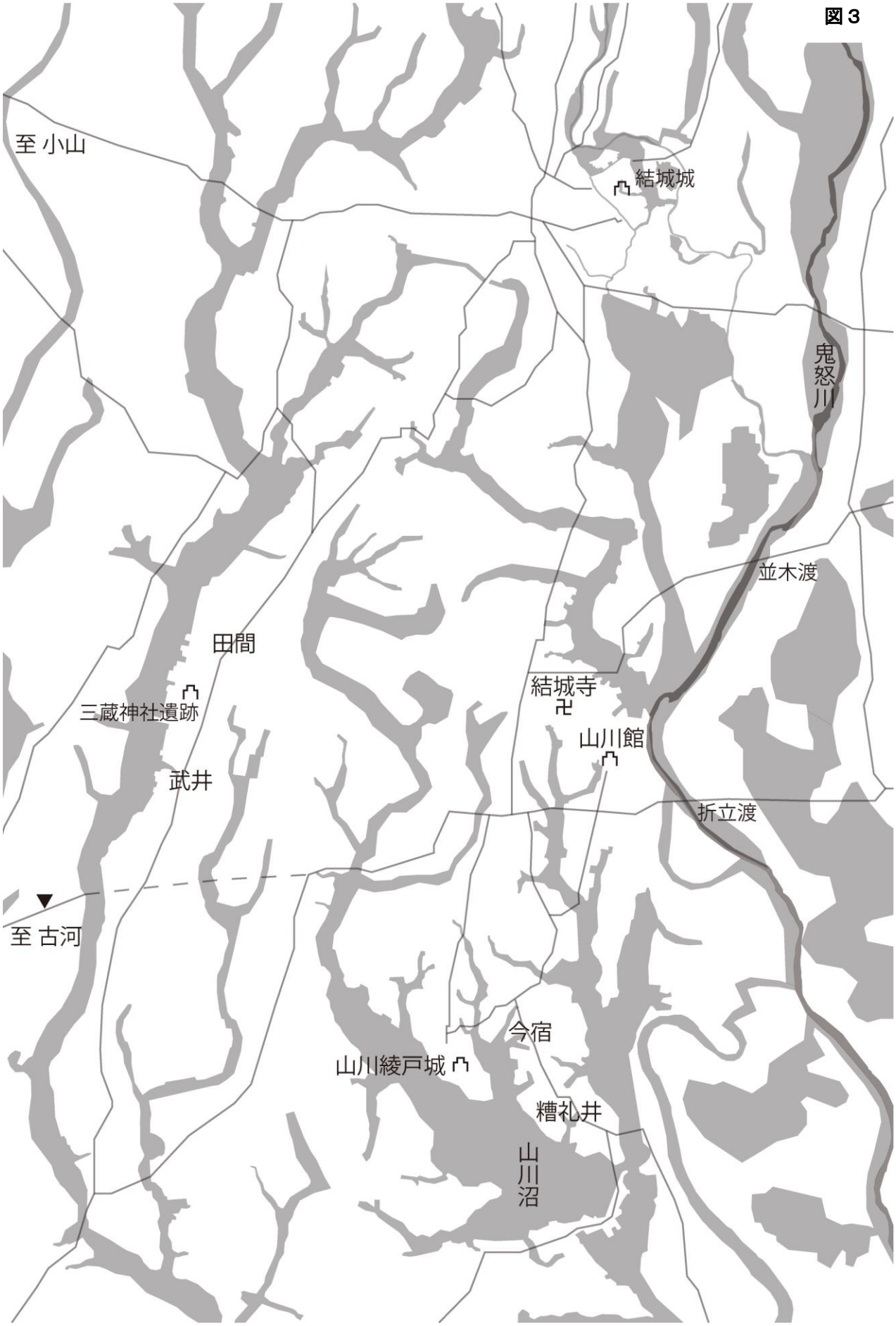


図３



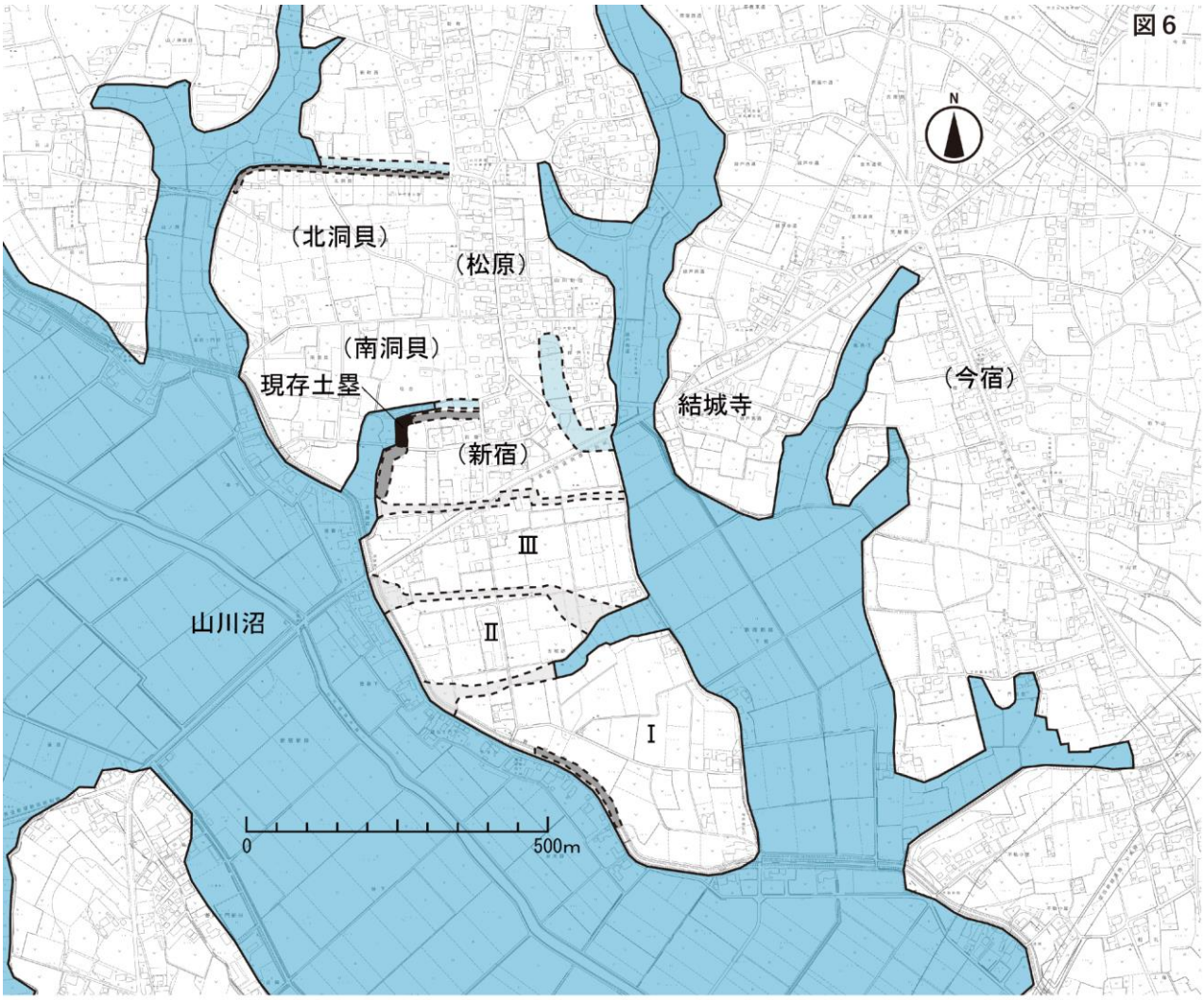


図７　山川古城図（部分、近世前半）
『三和町史資料編 原始・古代・中世』

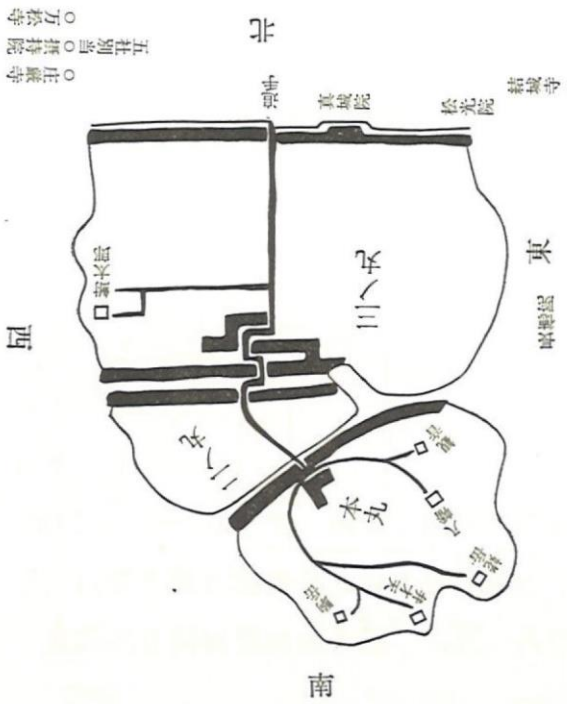


図８　山川城絵図（近世中期）『結城市史５』

第31図　山川城絵図（『諸国古城之図』より）